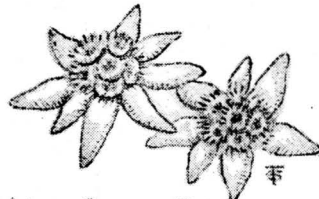


花のふるさとヒマラヤへ
まずヒマラヤ山麓のどこへ行くかを決めるのに、目的のエーデルワイスの咲く場所を考えた。その出生地が広い意味でのアジアであり、ヒマラヤ山地一帯も含めランタン谷もこの花の発祥地であることを知って、約三年前の春頃からいろいろの文献や報告書、地図、写真等を参考にして、計画をたて、ごく最近歩いた人たちの話を

ヒマラヤの エーデルワイス

=ランタン谷からガンジャ・ラ=

坂倉登喜子



Himalaya Edelweiss.

エーデルワイスの花

カット/筆者



昭和 51 年 (1976 年)

4 月号 (No. 370)

社団法人 日本山岳会
(J. A. C.)

定価一部 100 円

目次

ヒマラヤのエーデルワイス	
—ランタン谷からガンジャ・ラ—	
(坂倉登喜子)	(1)
石田吟松さんのこと	
(小野 幸)	(3)
続・霞沢岳の東面 (下)	
—小島鳥水追跡紀行—	
(近藤信行)	(5)
図書紹介	
P—29(1961~1970)	(7)
ナンダ・デヴィ、カメット報告	
出版に際して (渡辺兵力)	(4)
第 2 回日印合同女子登山隊	
準備報告 (カメット準備委員会)	(4)
会員・集合報告	(8)
第 328 回小集会員懇談会報告	
第 330 回小集会もちつき大会	
小林義正さんを偲ぶ会	
お知らせ	(9)
上高地山研 5 月末開所予定	
支部創立 30 周年記念行事	
武田久吉氏愛用品本会に寄贈	
昭和 51 年度 JAC 本部主催	
現地集会 (白山登山)	
ネパール登山規則 (原文)	(11)
会務報告、会員動向など	(12)
カット/谷アユ子	

聞いて準備をすすめた。
最近ではヒマラヤの厳しい高峰をねらう遠征隊の多いこの時代に、植物調査の目的でもなく、私たちはその発祥地の一カ所であるエーデルワイスの花のふるさとランタン谷を訪ねるトレッキングを計画した。

そして二十年の夢を追い続け、花との出会いを念じながら、雨期を外し、越冬前の花の生命のあるうちに、ランタン谷を目指して

ヒマラヤのエーデルワイスは、今までの発表によると、二種類以上あるということであるが、近年ヒマラヤ奥地への探訪も深まるにつれ、未知の境地も開けて、花の最盛期に訪れればまだいろいろの種類の花が発見されるのではないかと、今後に期待がかけられているようだ。

ヒマラヤのエーデルワイス

名、そして時は去る一九七五年十月二十日の事であった。

ヒマラヤのエーデルワイスは、今までの発表によると、二種類以上あるということであるが、近年ヒマラヤ奥地への探訪も深まるにつれ、未知の境地も開けて、花の最盛期に訪れればまだいろいろの種類の花が発見されるのではないかと、今後に期待がかけられているようだ。

ヒマラヤのエーデルワイス

名、そして時は去る一九七五年十月二十日の事であった。

ヒマラヤのエーデルワイスの開花期は雨期の七月頃と聞いたが、雪線の雪が溶けて、葉が芽生えて、花茎の頭花を包む白緑色の葉が開き、やがて黄色い花粉を散らして、真中の集まった花が褐色から黒く種をつけるまで、その間約三カ月間、形は変ることなく、ドライフラワーの形態で風雨に耐えて咲く姿は、高いところに咲く花

ナンダ・デヴィ縦走を成功させよう

ヒマラヤ山麓の三千メートル付近に広がる放牧場のヤクや牛たちは、この花をきらって、他の草は食べても、この草だけは食べ残すので、山麓一帯はエーデルワイスの花だけがはびこって群生し、踏みつけそうになるほど雑草のごとく、白い花の波が広がって咲いていた。

ヒマラヤ山麓の三千メートル付近に広がる放牧場のヤクや牛たちは、この花をきらって、他の草は食べても、この草だけは食べ残すので、山麓一帯はエーデルワイスの花だけがはびこって群生し、踏みつけそうになるほど雑草のごとく、白い花の波が広がって咲いていた。

ヒマラヤのエーデルワイス

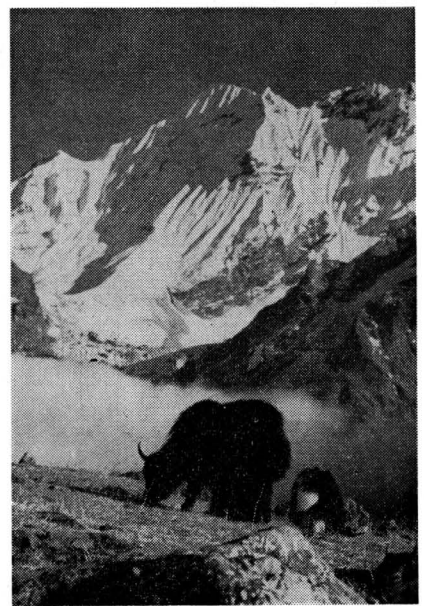
名、そして時は去る一九七五年十月二十日の事であった。

葉草ならば苦味があるため牛たちが食べないのだろうか……なぜこの花が三カ月も過ぎた秋まで咲き残っているのかという謎がとけたというもので、はるばると花を訪ねるために訪れた私たちにあってはなんとという幸せなことだったろう。

自然の中に白く高く、強く生き抜くその姿は、花の生命への力強さであろうか。私はそんな清純で生命力のある地上の星に心底から魅せられて、ヒマラヤの雨期が終った頃を見計らい、花との出会いに心はずませて、ネパールの首都、カトマンズの土を踏んだ。

本来ならば花の咲き始める七月頃、ヒマラヤ山麓を訪れば、きっと咲き始めたばかりの若やいだ花が見られる筈なのだったが……しかしヒマラヤのその頃は雨期で、あのダークブルーの空を限る雪の山の姿も見えず、シャクナゲの暗い原生林には絹糸のように細いヒルが、足元からもぐりこんでくるといふ悪条件もあるので、行く気にもなれないが、昨年六月高橋照氏はこの花の時期に、ツツジとシャクナゲの波を分けて、ガンジャ・ラを越えられた。

恐らくその頃はまだエーデルワイスの開花期には早く、その姿は

ランタン・ヒマールとヤク
キャンジンゴンバにて／撮影筆者

見られなかったのではないかとと思われるが、花の最盛期に出合ったら、どんなに素晴らしいことかと、思いをめぐらしたことであった。

ランタン谷を遡る

こんな頃訪れて花との出会いをたのしみたいものなのだが、山を見るなら十月から十一月に、そしてその頃なら越冬前で、咲き残った花も見られるだろうということ、残花への期待をかけて、カトマンズから車でベトラワチまで入り、ランタン谷へのスタートを切った。

ドンチェのチェックポストを過ぎ、去年から歩けるようになった楽な新道の歩き道をシャルプへ辿り、五日目の夕方ようやくランタン村に着いた。

昔、この谷に入ったティルマンが、ヒマラヤで最も美しい谷と讃えたランタンコーラに沿う道まで

は、畑の間の石畳を登り、黄色いキクイモの咲く日本の農家のような屋根の部落を抜け、或る時は田圃や畑の細い道を、また或る時は急に谷に下って、また急激な登りにあえぎながら、幾度かそんな道のくり返しの五日間だったが、昼間は汗ばむ暑さなのに、夜はぐんと冷える冬の寒さ、昼夜の温度調節がむずかしかった。

エーデルワイスとの出会い

ランタン村の朝はテント場の上の高原で、村の娘たちが干草を刈って、箆に高く積んで運んでいた。ネパールの女性は働き者で、背よりも高い草を頭で支え、部落の坂道をはだして歩く姿に幾度か出合ったが、子供たちまでが、生活のために手助けして力強く生きている姿がたくましく思えた。

そんな丘を登ってチョルテンのある道に出ると、正面にヒマラヤ

壁の立体的な刻みを見せるガンチエンボが、ピラミッド型の美しい姿を現し、ランタン谷最奥の雪山が一足ごとに近づいてきた。

私はカメラ二台と、八ミリ映写機、そしてスケッチブックまで欲ばって持ち、立ち止っては写し、座ってはスケッチをして、その目の前の展望にとまどいながら、キャッチして歩いた。

ランタンまでは一歩ごとにエーデルワイスに近づいてゆくのかと思うと、心なしか足の運びも早くなり、「坂倉さんはエーデルワイスの引力で足が早い……」と、メンバーたちに言われながらも、なんとなく心はずむ思いで、やっと恋人に会えるという心のときめきにも似た感激が、こみあげてくるのを感じた。

ここから先の左斜面は、ランタン・リルの前峰の山すそで、広い草原になっていた。

私たちはこの途中の道で始めて待望のヒマラヤのエーデルワイスに出合った。そのあたりまでハハコグサの白い花ばかりたくさん咲いていて、星形の葉の白い本物の姿がなかなか見られなかっただけに、見つけた時は嬉しかった。

咲いてから既に三カ月余もたった花の中には、まだ色失せぬまま黄色い頭花をつけているもの、またあるものはすでにほおけた種が飛んで、うらぶれた姿になってしまっているもの、そしてまた葉先

がとがったもの、葉が丸型のものなど、いろいろの花がいろいろの姿で咲き残り、大きな群落を見せてくれた。

私は接写レンズをつけて、あちこちとお花畑を歩き廻って、若くて形の整っている美しい花を探して、あらゆる角度から撮りまくったが、雑草のようにたくさん咲いていて、花も小さく、撮りにくくて接写するのに手間どった。

そしてそのあたりからキャンジンゴンバのテント場まで、エーデルワイスが点々と咲き続き、その白い花に混って、コバルトブルーの大型の背の低いリンドウ（ゲンチアナ・デプレッサ）が咲き競い、まさにランタン街道は、山岳展望と花に恵まれた、三千メートルの花の散歩道であった。

キャンジンゴンバは、ガンジャ・ラの対岸台地の放牧場で、私たちはチーズ工場のある前庭のような草原にテントを張り、三日間の高度順化の日々を楽しく過ごした。

一日は後のエーデルワイスの咲く山の中腹まで登って、黒くなったエーデルワイスの種を採集してきた。二日目はランシサカルカ方面へランタン谷の右岸を遡ったが、そこから少し歩くとランタンの飛行場があって、その滑走路の中にまで、小さなエーデルワイスが咲いているのには驚いた。そしてランタン氷河の見えるところま

で歩くつもりでいたが、岩峰をひと廻りすると、急にチベット国境にそびえるドルジェ・ラクバの姿が眼前に現われ、再び岩の間にエーデルワイスの花を見つけ、時間を忘れてカメラのシャッターを切るのに時を過ごしてしまった。

ガンジャ・ラ越え

四日目の朝、いよいよキャンジンゴンバから、ランタン谷を対岸に渡って、ガンジャ・ラへ出発した。

霧藻のまつわる秩父的な美しい樹林帯を抜け、ラリグラスの原生林をぐんぐん登って、第一目には中腹の北八ツの池を思わす小池の上で幕営した。その翌日は露岩の多い急な登りの果てに雪を踏み、峠のカール下のテラスまで登ったが、ポーターの装備不足と、荷物の重量が雪稜への荷上げを手間どらせ、時間切れとなって、五キロメートル付近のカールの底、雪上台地にテントを張ることになり、はじめてマイナス九度の寒い夜を過ごした。

その翌朝、陽の光がテラスのテント場にさしこむ頃、行動を開始してガンジャ・ラを目指した。先に登った外人隊のシエルパ

が、幸い私たちについていたシェ
ルバの知人だったので、先に張っ
て置いてくれた固定ザイルを使用
させてもらい、表面が薄く氷結し
てずり落ちそうになる雪を踏みし
めながら、一人ずつフィックスザ
イルをたよりに、慎重に雪の急な
斜面を峠へ登った。

五二〇〇メートルのガンジャ・
ラには、白い旗タルチョーが立っ
ていたが、私たちはそこからやや
右よりのルートから峠にとりつく
ことができた。

石田吟松さんのこと

小野 幸

石田さんとおつきあいは、戦
後、昭和二十二年大陸から郷里の
松本へ引揚げられ、それから寝覚
に移られて間もなくからだだったと
思いますので、もう十五年ほどに
なるのではないでしようか。わた
くしの宅へも遊びに来られたり、
ご上京されれば、必ずといって
よいくらい、つとめ先きにたずね
てくださいました。わたくしも木
曾に入りますと奈良井の越後屋や
寝覚の石田さんには、よく寄らせ
ていただいております。

石田さんは正統派の日本画家と
申したい方で、どこか故会員石井
鶴三先生に似たタイプを持たれて
いました。それはご自分の作品の

全員無事に峠へ登りついた時
は、感激で一瞬ジーンとくる眼の
底に、焼つくように白銀のラン
タン・ヒマールの雪の峰々が飛び
こんできた。

陽焼けたにこやかな皆の顔
に、輝やかしい太陽がふりそそ
ぎ、「ああ、やっとヒマラヤの峠
を越えられたのだ」という感慨が
沸き上って、喜びに満ちた人と人
の心の触れ合いがガンジャ・ラの
感激を最高にしてくれた。

一枚一枚を大切にされるとい
うことでありました。しかも、その作
品は責任をもって、ベストをつく
されてつくられておりました。

しかし、お会いすれば、絵のこ
とはぬきにして、山登りや旅の話
で時のたつのも忘れしました。し
たがって、お便りの中にも時々旅
のお知らせをいただくのです。

昭和三十六年夏、中央アルプス
登山のお便り、
「今年は槍ヶ岳行きを止めまし
て、すぐ裏の駒ヶ岳へ登りまし
た。去る八月十四日の五時半に妻
と共に家を出まして、初めての事
とて心配して行きましたが、三合
目下の敬神の滝に小屋があり、其

処から急の登りです。五合目の小
屋附近から道は益々わしく、其
上雨もありまして、やうやう九合
目の小屋へ着いたのは六時半でし
た。途中泊る処がありません、暗
くなったらどうしやうかと不安で
した。十五日は四時半頃頂上へ行
きましたが、霧で御来光は拝めま
せんでした。伊那谷から沢山登っ
て来ます。木曾谷からは名古屋方
面の人が登りますが、上高地方面
にくらべますと淋しい事で御座い
ます。お天気が悪いのでブヨが沢
山いて写生など出来ませんでした。
帰りは八時半に九合目の小屋
を出まして、木曾福島道を下り、
二合目の駒の湯へ六時半に着きま
した。若い人は飛ぶようにして下
りますが、年寄り七十四才の事と
て、一足一足ふみしめて歩きます
のと雨もありましたので、手間の
かかるなさない有様でした。昨
年同様足の爪が紫色になり、いた
くて困りました。」

それから、昭和三十八年夏は槍
ヶ岳登山、
「私と妻は七月二十三日から、
上高地から槍ヶ岳、東鎌尾根の急
峻峻路を西岳、大天井、燕岳と縦
走、中房温泉に下りました。若い
人でしたら三日の行程ですが年寄
りの事故大事をとり、三倍の八
日、楽しい旅でした。」

この年の秋、友人の告別式に松
本に行かれ、軽い脳出血で入院さ
れました。また、この前年には松本

病院で腹部の手術をされており、
この頃から左手が不自由になら
れてきました。

昭和四十七年五月二十七日付の
おはがき、
「先日旅行中の処、御尋ね下さ
れ失礼いたしました。私も八十四
才となりましたので歩行困難の為
いつも妻を連れて歩いて居ます。
耳も遠くなり、字をかくにも不
由して居ります。耳が遠くなりま
したので電話はかけられません。
又今迄のよう御尋ねする事も出来
ません。来る六月四日のウエスト
ン祭には上高地へ行く考えで居
ります。」

昭和四十九年の賀状はご自身の
手でかかれたものをいただきました
が、夏以後は奥様の代筆でいた
だくようになりました。昭和五十
年の賀状も奥様の代筆でありまし
た。

「謹賀新年、私は去年五月庭で
ころんから体の自由を失い、と
うとう寝込んでしまいました。あ
けてもくれても寝るより外はな
く、時々起きてもすぐ疲れてね
てしまいます。」
そして、とうとうこの昭和五十
年一度もお見舞にもうかがえ
ず、かなしくもながいおわかれと
なっていました。

なお、石田さんは明治二十一年
三月十五日松本生まれ、本名吟治

●最も登山条件のよい季節に

モンブラン・マッターホルンへ

ヨーロッパアルプス/フリータイム17日間

(チャーター便でなくレギュラー便を使います)

*期日 7月13日から7月30日

*費用 24万円

《費用に含まれるもの》 バリー東京往復航空券/パリ到
着日と出発前日のホテル/宿泊代/送迎バス料金(パリ
空港-ホテル間)/団体行動中の税・サービス料/説明
会費

※ほかに、参加者が目的とする登山のプランニングと指
導、フリータイム中の宿泊と交通の手配などを行ないま
す(詳しい説明書送ります)。

主催 ソネックス友の会

〒105 東京都港区芝罘平町33番地

協賛 郵船航空サービス・スイス航空

ソネックス友の会は、営利を目的とした団体ではあり
ません。一流航空代理店の協力のもとに、10年前から山
仲間達で、最も安く合理的なヨーロッパアルプスの旅を
考え実践しているグループです。

郎、昭和五十年十一月六日逝去、日本画無所属作家、日本山岳会会員(会員番号六七二二)、画文集に『満州画帳(満州の風景)』など、参考資料としては日本山岳会々報昭和三十六年四月号、石田吟松「ウエストン氏と有明山に登った

●ナンダ・デヴィ、カメット報告

出発にさいして

日印ナンダ・デヴィ登山隊
総隊長 渡辺 兵力

昨年来準備をすすめてまいりまして日印ナンダ・デヴィ縦走の登山計画は、去る三月中旬に諸般の準備が資金関係の一部をのぞき、ほぼ終りましたので、三月二十五日に、鹿野勝彦隊長ほか五名の隊員が先発隊としてニュー・デリーへ出発いたしました。三月はじめに船便が出港しておりますので、先発隊は先送の荷物をボンベイで受けとり、三月下旬にニュー・デリーでインド側隊員と合流し、現地での準備をすすめ、四月十日にはキャラパンの出発地点ジョシマートに集結いたしました。本隊は四月十二日に出発、先発隊を追ってニュー・デリー経由、ジョシマートで先発隊と合流いたします。出発直前の最終計画では、ベイス・キャンプ(ナンダ・デヴィ内院、約五〇〇メートル)入りが五月十日前後、それから六月二十

当時の思出、横内齊「石田吟松画伯を寢覚に訪う」、同会報昭和四十九年四月号、鈴木実「石田深山と山岳画」などがあります。(五十年十一月二十八日、国鉄ストの日)

日にはニュー・デリーに帰着というスケジュールをたてました。

御存知の方が多いと思いますが、ナンダ・デヴィ氷河に入りますには、有名ナリシ・ガンガ谷の険路を経由していかなばなりません。地元のポーターがたいへん集めに

くといわれるガルワル地方では、ベイス・キャンプまでの荷上げが非常に大きな問題になります。昨年の仏印合同隊はインド空軍の協力で、ヘリコプターで荷物の一部を運んでおりますが、今回も同じ方式をとるうかは今のところははっきりいたしておりません。したがってベイス・キャンプ入りにつきましては、多少の計画変更を覚悟しております。

なお、縦走計画につきましてはフランス隊の情報や、先日、来日されたテンジンさんの経験談などをとりいれて、これまでに数回の素案を作成し、技術委員会でも御検討をいただきました。何分にも、七四〇〇メートル(東峰)から七八〇〇メートル(主峰)の高

度の未知の尾根の縦走でありますので、結局は、ベイス・キャンプからの標高差二千数百メートルの山を同時に二つ登り、さらに縦走隊をだすという大規模な登山になります。計画では主・西峰(南東尾根)と東峰(ロングスタッフ・コルから南稜)へそれぞれ四つの前進キャンプをだし、さらに、主峰の縦走尾根の約七三〇〇メートルのところにさらにW5キャンプを設営して、縦走隊(二名)は東峰頂上から出発して、第一日目はW5キャンプにいたり、第二日目に主峰頂上を経由して、南東尾根を下降する予定であります。

しかし、今回の隊は、登攀隊員十五・十七名(インド側隊員とサードを含む)とダーズリン・シエルパ約十名、計二十数名の力で登攀を実施することになりますので、荷上能力等についてはあまり余力が持てないと思われ、参加者(シエルパを含めて)の体調と天気具合とがうまく揃えば十分に成功(初縦走)する自信をもっておりますが、必ずしも容易な計画ではないと考えております。

とはいえ、JACとしては、はじめて、若い会員の自主的な協議で登山計画が育ち、さらに、インド側の官民あげての協力が約束され、そのうえに、たいへん多くの会員各位の精神的、物質的な御助力が結集して、実現の運びにいたった計画でありますので、私たち

隊員一同は、この恵まれた機会と広い分野からの御支援とがあつてこそ、憧れの名峰ナンダ・デヴィに挑戦できるようになったことをしっかりと心根にいだいて、旅立つ覚悟でおります。

インドの登山家と文字通り一つの隊を組んで、大きい登山を試みるという点については、私たちがこれまでの海外遠征では経験していません、特別の責任を感じております。未経験なるがために、正直なところ多少の不安を覚えます



が、この試みが成功すれば、日本の登山界にとっても一つの前進と評価できると考えております。私たちは山登りの方とはかくとして、社会生活の経験の少ない若い集団でありますので、異民族の山仲間とどのようにおつき合いをしながら旅をしていけばよいのか、戸惑うこともあろうかと思ひます。しかし、あくまでも山仲間としての考え方に徹して対処していきます、愉快な山旅であったという気持ちをインドの仲間と与えること

を、この計画の一つの目的と考えて、やっていきたいと思っております。もちろん、私たち自身は日本山岳会の隊らしく、十分にパーティーシップを発揮し、慎重な行動を守るつもりでおります。

諸般の事情がきわめて困難なこの時期に、比較的短い準備期間で出発までに漕ぎつけましたのは、ひとえに会員各位の御支援の賜物と感謝しております。出発前にはなにかとあわただしく、お世話になりましたところへ御挨拶に何う余裕もなく、山へ向いました。会誌の誌上をかりまして、一同に代りお礼がたがた、御挨拶の言葉に代えさせて頂きます。

現地連絡先

Indo-Japanese Nanda Devi Expedition 1976, c/o Indian Mountaineering Foundation, Ministry of Defence,
18 "Q" Block, New Delhi,
110011, India.

第2回日印合同女子

登山隊準備報告

☆隊員(日本側)『山』三六七号で発表した候補五名のうち、勤務上の事情で河上絃子が参加不可能となり、三月二日委員会において富田由紀子(会員番号七九〇六)に変更した。

(インド側)十二月二日付で下記五名の連絡があった。M・アガル

ワル(リーダー、医師、第一回日印合同隊メンバー)、C・P・エイトワル、T・F・バーディ、R・S・グプタ、B・バナジー。全員六〇〇メートル以上の経験者である。

☆装備・食糧 IMFとの連絡で共同装備のかんりの部分をIMFから借用することになり、日本か

ら輸送する物品の重量は装備五〇〇キロ、食糧三〇〇キロ程度になる見込みである。特注を含めたすべての物品購入を三月末に終了し、四月下旬空輸する。

☆募金 三月二日現在、企業関係三〇〇万円、会員・個人九十五万円とほぼ四〇〇万円に達した。(ご協力いただいた皆様に厚く御礼申し上げます。)

今後とも会員の皆様からのご指導、ご支援をいただきたく事務局より重ねてお願い申し上げます。(カメット準備委員会)

続・霞沢岳

の東面(下)

—小島鳥水追跡紀行—

近藤信行



最後のルートをさぐる

谷の夜明けはおそい。昨夜、テントのなかでおそくまで山の話にふけていたためか、眼をさましたのは六時をまわっていた。朝食は三君のはからいで冷やし素麺としゃれこんだが、その仕度をしていると、ひとりの釣師がのぼってきた。われわれを怪訝そうにみつめて対岸を通りすぎた。そしてまもなく下っていった。おそらく獲物はなにもたのたのさか、なにか不満そうなおももちであった。「それにしてもきちがいはいはんだなあ」とだれかが言った。どちらもおなじ酔狂だが、上にのぼるかのぼらないかのちがいだだけだ。

八時、露营地を出発。今日は霞沢線をこえるだけだし、去年おおよその見当をつけておいたから気分よく楽であった。鳥水の言う八溪洞の石燕を追ひ、流水を乙字形に横斜断し、渾木叢葬の間に出現して流れをたどるわけだが、樹林帯のなかの沢筋には、青苔が光っていて、みごとな光景であった。最後の樹林帯をくぐりぬけて、左からおちこむや大きな沢をわたると、霞沢最奥部の入口となる。あらあらしくおしながされた堆石をのぼってゆくと、稜線がみえはじめ、われわれが探索しようとする右俣があらわれてきた。

うっかりすると見おとしそうな水流だが、五、六メートルの小さな滝がかかっている。昨年、鳥水一行のルートについて、ここで山崎さんと論じあったことをおもいだした。

ここからはまだ霞沢岳本峰はみえない。荷をおろして、節田、中出水、高橋三君と本峰をみにゆく。昨年の露营地がどんなかたてでのこされているかをたしかめてみたかったのだが、山崎さんに声をかけると、「行ってこいよ、おれはここで待ってるよ」と、濡れた靴を干しはじめていた。

岩石の星々たる河原をのぼり、左にまがりこむと、おもむくに霞沢岳のどっしりした山容があらわれてくる。その中央に、昨年のがむしやらのぼりつめたガレ場が白く光っている。昨年、ほっそりとしてみえたそれは、下部が幅ひろく広がっているように観察された。あとでほぼおなじ位置から撮った二枚の写真と比較したら、あきらかに変化がみとめられた。これも七月の集中豪雨のなせる業なのかもしれない。左岸台地の旧露营地のそばまで浸食作用をうけているのも、おそろべき水の力によるものとおもえた。頂上稜線の、右に波うつような斜面から一本のガレがおちこんでいる。これを手がかりにすれば、稜線中央部への登高もたのしめるだろう。われわれはこの最奥部の景観をたのしみながら、一時間半あまりのんびりとすごした。

十一時五十五分、いよいよ右俣にはいる。幅わずか一、二メートルほどの沢筋で、階段状の小滝がつづく。水につかっているのは、はなが、ぐんぐんと高度をかせぐことができる。本谷を表面とすれば、小さな路地にまよいこんだようなものだ。しかし鳥水の紀行文には、具体的な表現としてあらわれてこないのである。《石壁半にして顧れば、我が徒渉し来りたる霞沢は、山流の特徴なるS字形に曲折して、銀鎖を繋ぎ合したる如くに畝ねり、両山倚仄したる

間を悠々として蛇行す》という描写が、右俣と本流との分岐点でのものとしたら《悠々として》という言葉は正確ではない。まえに引用した《愈々霞沢山の頂に近づくまで、路ならぬ路——羊腸といふは猶路あるなり、是は則ち然らず……》の一節が、右俣にはいつてからの記述として読むことができるが、ともかく急激に変化する登路については、なんらふれていないのだ。そして右俣の水の流れについてもなにも書いていないのである。

が、ややともすると漢文脈の陥穽におちこんでいる。

それにしてもこの小さな沢でわれわれをたのませてくれたのは、天然わさびの簇生であった。鳥水も、

《紫巖、山葵の世をすねたる冷嘲者の如く》と記録しているが、ほとんど陽がささず、苔むした岩石と清澄な水のあいだに、この水生草はひっそりと茎をもたげているのであった。砂礫から

それを指先で掘りだすと、七、八センチの根茎は白緑色をおびている。採集にもっとも熱心な山崎安治さんの「今晩はこれ一杯」というほがらかな声が、うしろから聞えてきた。

水のながれが細くなって、樹木もまばらになってきた。このあたりから登路のみきわめをつけなければならぬ。水殿側の尾根にとりつくことは考えられないし、と言って、左側にまきこめば急斜面のヤブこぎを強要されるだろう。最低鞍部に達するためには、あとはガレをよめるほかはない。こんなときに大きな役割をはたしたのは、節田君の木登りであった。ほかの者が煙草をくゆらししているうちに、彼はするすると木にのぼって、地図をひろげながら上部斜面



霞沢乗越より明神岳を望む

を偵察する。

「あれは佐渡の生まれなんです、いつもあえて本土をながめていたんですよ。猿みてえだなあ」おなじ山岳部OBの中出水、高橋両君も、感嘆久しうしていた。稜線からはげしく押しながれたガレをのぼり、右手の草つきにとりつく。一歩踏みだすとがらりと岩石がおちる昨年のルートにくらべたら、楽な気分であった。三人の若手はすいすいとのぼって行った。また伏流の音色がきけるのではないかと私は期待したが、ここではその気配は感じられなかった。

十五時、鞍部直下の草つきに達して休憩。あたりはいちめんのお花畑だった。センジュガンピ、マルハダケブキ、トラノオ、トリカブト、クガイソウ、シシウド、グ

ンナイフウロなど色とりどりの花が咲きほこっている。さらに草の根をつかむようにして、斜面をのぼる。十五時三十分、そののぼりつめたところが霞沢稜線であった。草木をわけて北方をながめると、真正面のやや右手に明神岳の岩峰群が一行となつてかさなっている。その背後に前穂高の鋭角的な頂稜が厳然として姿をみせている。すばらしい景観であった。われわれはここを霞沢乗越と名づけた。

《白雲裂けて自ら文を成すところ、堆藍の尖山奇峰——かれこそ穂高山よ、その肩に頭を載せて尖れる額を突き出せるは、我が鎗ヶ岳にあらざるや》

たしかにこのとおりの光景であった。鳥水のいう《霞沢の絶頂》からの敘述は、この乗越をおいてほかにないであろう。前穂の岩峰はほとんど槍ヶ岳の形相とまちがえるほどなのである。当時、唯一のたよりであった量瀧式の輯製図（二十万分の一）では、穂高と槍がさほどの距離をおかずと並んでいるし、槍が穂高よりも高いとされていたのだから、槍ヶ岳とおもいこむのは当然であったとおもわれる。《我が鎗ヶ岳にあらざるや》という言葉は、三年来登頂のおもいをかためてきた鳥水の、もっとも直接的な感動の表現として読むべきであろう。明治三十年代の未発達な山岳知識のなかで、彼は身

をもって輯製図の虚実を解明しようとしてきただけに、この言葉は時代の雰囲気をよくつたえているし、その証言として大きな重みをもっている。この小さな乗越に立って、私のこれまでの疑問はすべて氷解した。

前穂に雲がかかりはじめた。約三十分、ゆつたりと休憩をとってから白沢をめがけて下りをはじめた。ここにはかすかな踏みあとがあった。《是より霞沢山を北西に

下るに決す、下り終るところは即ち穂高山の麓なる神河内にして、穂高山と肩を駢べて吾鎗ヶ岳在焉》と鳥水は書いていたのだが、たしかに六百山の方へおちこんでいる沢は、北西にむかっていた。つぎつぎにあらわれる岩棚をまっしぐらに下って、白沢右俣の本流と出合ったのは十七時三十分であった。下降に一時十五分要したことになる。五人はとっておきのビールで祝盃をあげることにした。沢水でそれを冷やして、一気にのみほすと、なにか晴れやかな気分になって、おのずと歓声がわいてきた。《斯くの如くして我等は高山より谷底に入り、谷底の窪

目より水と俱に吐き出されたるなり》と鳥水の紀行文に読むことができるが、われわれもおなじような実感を味わいつつ、梓川のほとりにとびだしたのであった。

十九時三十分、折からの雨にたたかれながら、上高地の山研には

いる。

山を
きれいに
ごみは
持ち帰ろう

二度にわたった霞沢溯行のなかで、私は「文庫」初出の「霞沢の急瀧を渉る記」「梓河畔に立ちて穂高山を觀する記」をたずさえて、その要所をたしきめながら歩いてきた。十分に理解できたところもある。鳥水・金次郎二氏がなぜこの道をえらんだのかという点については、さきに記したのでくつかえさないが、槍ヶ岳への登山道としてはきわめて特異なものであった。われわれは彼らの先蹤を踏んで、このルートが白骨方面から上高地への近道、それも猟師樵人の道であったことをあらためて感じた。一般道とはとても考えられないからである。

それにしても、当時二十九歳の鳥水はかなり早い足どりで稜線を越えたといえるかもしれない。時間には明確ではないが、夜明けとともに白骨温泉を出立し、午後一時に稜線にたどりついている。二人の案内人が熟知の道を荷をかつい

で同行したにせよ、一日でこえて
いるのである。われわれの霞沢探
索は、第一回目の本谷・頂上へこ
えに三日、第二回目の右俣・乗越
えに一日半の時間を費したが、先
を急ぐ旅ではなかったから、こ
谷の様相をゆっくりとみておこう
という気持があった。烏水ルート
が確認されたいまとなってみれ
ば、霞沢乗越の道は上高地入りの
一日コースとしておもしろい登高
がたのしめるだろう。もちろん増
水時には困難を覚悟しなければな
らない。

ただひとつ、確認できなかった
点は、烏水一行がねずみ落しのあ
たりを高捲きしたという記述であ
る。霞沢の変化を考慮にいれて
も、もしそれが事実だとすれば、
あるいは伐採や岩魚釣りのために
往時は道がつくられていたのであ
るうか。歴史のなかに埋没してし
まったそれは、いまとなっては究
明の方法はない。

烏水一行以後、霞沢ぐえのルー
トがたどられたことがあったかど
うか、それはわからない。記録は
みあたらないのである。しかし、
七十三年ぶりに不明確な部分をた
しかめ得たのは、愉快な追跡登山
であった。烏水の『鎗ヶ岳探検
記』が探検時代の日本アルプスに
文学的香気をあたえた記念碑的な
作品であるだけに、解明してみた
かったのである。

(完)



P-29
(1961~1970)
大阪大学山岳会

一九六一年にP-29の西面試登
を行ってから第四次隊が一九七〇
年に登頂するまでの四次にわたり
大阪大学山岳会が派遣したP-29
登山の総決算である。

序文に横有恒氏が述べている通
り、マナスル三山の中でもP-29
は最も手強い相手であった。ヒマ
ルチュリが一九六〇年に登られて
から十年を要しての登頂であっ
た。まずこの十年の間、同山岳会
が多岐にわたる困難を克服し初志
を貫徹して成功したことを心から
お祝いしたいと思う。

本書の内容は、篠田軍治前会長
の「P-29の十年」と題する巻頭
記事にはじまり、篠田氏による第
一次西面の試登(一九六一年)、木
村裕一氏による第二次隊東面の偵
察(一九六三年)、玉井康雄氏によ
る第三次隊東面の試登(一九六九
年)、住吉仙也氏による第四次隊
P-29登頂(一九七〇年)、住吉

氏による検討と反省、渡部洋氏の
追悼、記録と雑感よりなっている
。その他に巻頭に豊富な写真を
収録しているが、東面、西面のパ
ノラマ写真は素晴らしい。

第一次隊の西面試登の記録につ
いては既に一九六二年十月、大阪
大学山岳会より、「P-29西面」と
題して刊行されている。

その後一九六三年、東面に転
じ、以後の三隊はいずれもP-29
の東尾根にブンゲン氷河からとり
ついている。

一九六三年の偵察で可能性を見
出したが、その後ネパール政府の
登山禁止のため六九年まで中断し
た。登山解禁の直後一九六九年秋
には第三次隊を派遣し、東壁の水
壁に挑み七三五〇メートルまで達
し登頂の可能性を見出し、翌七〇
年の第四次隊が成功したことはご
承知の通りである。

ただこの登頂は、帰路に登頂隊
員二名がスリップ事故で遭難死す
る事故に遭い、果して登頂といえ
るか否かと論議のまじったこと
もあるが、住吉登攀隊長の撮影
になる登頂時の写真が証拠写真と
なっており、現在では登頂が公認さ
れている。

本書でも事故の検討と共に住吉
氏により、「頂上と登頂」と題し
て詳細な考証がなされている。

第三部にも相当する『記録と雑
感』では、遠征のマネージメント
の面で参考になる、「荷物の梱包

・輸送・通関」、「シェルパの死亡
事故」、「遠征隊事務局での回顧」
の他に学術的な報告として、ツラ
ギ氷河の流動(篠田軍治・広瀬貞
雄)、渡部のビッケルの損傷とそ
の原因(篠田軍治)、ネパールの
医学教育改革(水野祥太郎)、薬草
と生薬を求めて(難波恒雄)、ネパ
ールの民家(大野義照)等が収録
されているが、難波氏の生薬関係
の貴重な成果は高く評価されてい
る。

巻末には、参考資料リスト、決
算報告、協力者芳名一覧等を収録
しており、恩地裕会長の「あとが
き」、徳永篤司氏の「編集後記」に
かえて「でしめくくっているが、

これを読むとこの十年間の苦勞が
よく判る。

P-29が一段落した現在、阪大
山岳会には次の目標としてカラコ
ラムへ登山隊を送る計画があると
聞く。今後の活躍を期待して止ま
ない。

A5版、一六九ページ、写真32
葉、地図四枚、一九七五年十一
月大阪大学山岳会発行、非売品
なるも左記へ申込みば入手でき
る。頒価三、三〇〇円。

〒565 吹田市山田上、大阪大学
工学部金属材料工学教室、田井
英男宛。

(松田雄二)

最新の 山の報告書 が入荷しま した。

●インド・ヒマラヤ帰国報
告書、日本ヒマラヤ山岳協会
六〇〇円 ●バミール遠征登
山報告書、1974年レーニン
峰、新潟大・大阪外語大
バミール登山隊一、〇〇〇円
●槍ヶ岳遭難報告、京都大
学山岳部二、〇〇〇円 ●ヒマ
ラヤ編年志II 1947-1950
MARCEL KURZ 水野勉訳、日本山
書の会二、〇〇〇円 ●溪谷3
溪谷溯行資料、四、〇〇〇円

茗溪堂

「山の本の売場」お茶の水店三階
営業時間は平日・午前10時30分より午後8時、
日曜祝日・午後0時30分より午後6時30分です。

会員・集会報告

第三二八回小集会

会員懇談会報告

昭和五十年十一月二十日、午後六時より集会委員会主催による会員懇談会（担当理事神崎忠男）が行なわれた。これは、山岳会への要望を末端の会員からも出してもらえるように、との意図で行なわれたもので、会を効率的に進めるために以下の三つのテーマを揚げ、希望するものに参加していただいた。その概略は次のとおり。

テーマ1 山岳会について

会場 湯島会館
司会 中川 武

アドバイザー 望月達夫（副会長）
小倉董子（山岳研究所理事）
出席者 飯田進、神崎忠男、川井ヨシノ、小林重一、千葉保之、土井高夫、中西章、錦織保清、西奥亮平、野口茂、浜野正男、松本熊次郎、安彦六郎 以上16名。

現在の会のムード、特に年輩の方と若手、古参会員と新会員とのギャップをどうしたらよいか、という問題を山岳会の性格や集会的あり方などの面から意見交換した。仲間を得たい、図書に興味がある、情報を得たい、実践の上から多くの指導を得たい、などの意見に加え、山研の現状と利用のしかた、山岳会の種々の集会への会員参加のあり方へと話が進んだ。そして山岳会のあり方として、運営技術の問題もさることながら会員としての自覚の精神が大事なことを再確認し、会員参加の意義を強調して散会した。

ある、情報を得たい、実践の上から多くの指導を得たい、などの意見に加え、山研の現状と利用のしかた、山岳会の種々の集会への会員参加のあり方へと話が進んだ。そして山岳会のあり方として、運営技術の問題もさることながら会員としての自覚の精神が大事なことを再確認し、会員参加の意義を強調して散会した。

テーマ2 自然保護について

会場 日本山岳会々室
司会 井口邦利

アドバイザー 織内信彦（副会長）
山本良三（自然保護理事）
出席者 朝井一男、池田智津子、岡崎修一、掛川純之、児玉茂、越田和男、斎藤晋、須田紀子、高橋信博、中村純二（同夫人）、中原万次郎、原康夫、羽田栄治、福島健一、村井米子、矢口陽一、「屋久島の自然を記録する会」より（木村、杉野、本田）の三氏 以上23名。

森林開発、林道、観光道路などについて、参加者の経験上の実例や問題点などが出され、議論された。また山岳会として実際に活動している方々から、林野行政と保護の矛盾や過疎と開発、住民意識など、問題の根深さを聞いた。会には「屋久島の自然を記録する会」からも三名の方が見え、屋久杉の保護の話と山岳会に活動への協力の要望が出された。

「会」からも三名の方が見え、屋久杉の保護の話と山岳会に活動への協力の要望が出された。

テーマ3 登山のモラルについて

会場 湯島会館
司会 浅田治男

アドバイザー 山崎安治（評議員）
大倉昌身（青年懇談会理事）
出席者 伊丹紹泰、岡沢祐吉、小原俊、河野幾雄、小林政志、柴田初子、砂田定夫、鈴木敦子、武田満子、東原進、堀内章雄 以上14名。



多様な意見が出されたが、要約すると、登山人口の増加に伴い、モラルについての考え方やとらえ方に混乱が生じ、人により年代によって基準が違う。価値感の多様化とともに「常識」の範囲も変わってきたのではないか、などの問題、また登山の際の最低限必要な知識を指導教育する側にも問題があるということから、リーダー、パーティーのあり方にまで議論が及んだ。

結論として、ひとりひとりが山を愛し、自己の登山環境をきびしくすれば、他の人々にも影響してモラルが広まってこよう。山岳会

員であれば、ルームに通うことによってモラルが生まれよう、というものであった。

第三三〇回 小集会

もちつき大会 12月21日

一年のしめくくりの恒例もちつき大会を、綾瀬の観音寺にて行いました。午前11時より曇天にもかかわらず、会員、非会員多数の参加を得、童心にかえて力いっぱいついたつきたて餅と酒で楽しいひとときを過ごしました。最後に山岳会々室のおそなえを作り、新年の用意としました。

なお、今回は会員の長谷川良典氏に会場を提供していただき、大変お世話になりました。

参加者——中保、青木一夫、朝井一男、堀正彦、西村久平、高遠宏、大倉昌身、芳野菊子、宮下秀樹、佃和夫、斎藤かつら、堀内章雄、寺本正史、蒲地辰彦、戸張隆、神崎忠男、川井ヨシノ、中川武、福島建一、小原俊、小林政志、東原進 以上会員22名、非会員28名（合計50名）。

小林義正さん

を偲ぶ会

去る二月二十日、「小林義正さんを偲ぶ会」が山岳会ルームで開かれた。

小林義正氏はながらく図書委員

長をつとめておられたが、昨年十二月に亡くなられた。このことは、二月号に山崎安治氏の追悼文が載っているのご存知の方も多いと思う。このたび図書委員会を中心となって、故人を知っている人びとに呼びかけて、追悼の会を開いたわけである。小林氏の遺族の方も栄子夫人はじめ数人出席され、なごやかなふんいきのなかで、故人を偲んだ。

田辺主計、島田興、吉田久兵衛、深田志げ子、望月達夫、近藤信行、野上成男の各氏がかかるがわる立って、小林義正氏との交遊、思い出などを語った。故人がいかに山の本を愛していたか、またいかに多くの人と本をとおして交際されていたか、などがしみじみとうかがわれる話であった。ちょうど、この日遺族の方が、故人の遺志ということで、「高山深谷」一〇〇の大揃いを、山岳会に寄贈された。小林氏がもともと好んだ山の本ということであった。山岳会の図書室にもない貴重なもの、ありがたい寄贈であった。

『山と書物』正・続が小林氏の唯一の著作であったが、その後の文章をまとめて、続・続編の発表も考えられていたらしい話も出て、今更のようにその逝去が悼まれたのであった。会の閉会間近になって、京都から小谷隆一氏が来られ、高嶺文庫（小林氏の蔵書）の大部分を手入されたいきさつな

どを話されたのも、故人を偲ぶのにふさわしいことであつた。記念として、集まった人びとが

●お知らせ

山研(上高地)

五月末開所予定

山研設立三年目を迎え、運営委員会の委員、地元の方がた、管理人の協力で、山研運営も軌道に乗りはじめました。

当初、使用規定が厳しすぎたためとPR不足のため、四十九年度は、利用者数、年間三七七名でしたが、五十年年度は、五八九名と確実に増えています。

しかし、五十年年度は、約五〇万円の運営費が、本部負担となっています。独立採算の方向へ持っていくのが理想ですので、ぜひ皆さまのご協力、ご利用をお願いいたします。

使用規定の一部変更(昭和五十年七月十日理事会承認)をお知らせします。

第三条の項で、使用予定日の一カ月前から申込を付ける。ただし当日宿泊可能の場合は、山研直接申込みでもよい。

第四条 非会員は、紹介者名を記入しなければならない。万一不都合なことがあった場合、紹介者はその責任を負うものとする。

色紙にサインをして、ご遺族に贈り、散会した。(水野 勉)

第五条 山研使用者は管理運営費として次に定める料金を支払うものとする。

会員 一、二〇〇円
非会員 二〇〇〇円
就学前子供 五〇〇円
小学生 八〇〇円

ただし本会職員は、会員と同様の料金とする。

なお、くわしいことは、事務局にお問い合せください。

研究会、講習会などにぜひご利用ください。

五月末開所をめどに準備中ですが、決定しましたら、本誌を通じて、お知らせします。

(山研担当理事 小倉)

支部創立三十周年記念行事

越後支部

昭和二十一年五月二十八日、日本山岳会越後支部創立総会を苗場山において開催以来三十周年を迎えた当支部では、次により記念懇親会及び記念山行(苗場山)を計画いたしました。

詳細は近日中に追って別途ご案内、ご通知申し上げますが、参加希望者は日本山岳会ルームまたは

直接当支部へご照会ください。

記念懇親会

日時 6月19日(土)午後4時より

場所 新潟県南魚沼郡湯沢町 湯沢温泉 富士屋旅館

記念山行

懇親会の翌日、苗場山の記念山行を行ないます。

この記念山行は苗場山日帰り往復のほか、赤沢コース、小松原コース等の縦走も計画しております。また懇親会の翌日、希望により、記念山行と平行して上越史跡めぐり等も計画いたしておりますから、会員多数のご参加をお待ちしております。

武田久吉氏愛用品

本会に寄贈

名誉会員武田久吉氏愛用品を一月二十九日武田家より本会に寄贈していただきました。当日は山崎安治、山本良三の二人が武田家より受領し、ルームの談話室に展示しました。大変珍しく、貴重なもので、長く保存したいと思っております。武田家の御好意にあらためて謝意を表します。(山崎)

記

- 一、スキー一台
- 一、金剛杖、スキーストック各一
- 一、小田原提灯二コ
- 一、きやはん三組
- 一、各山頂の岩石一箱
- 一、細引き一本

一、明治三十八年富士山登山にはいた下駄一足

一、スキー靴一組

一、富士根元記一冊(英国薩道蔵書)

一、河内名所図会全六冊(〃)

一、富士登山記念品一組

一、少年時代愛用のメンコ、帳面一、大日本全図一

一、石器、土器破片一箱

一、地学雑誌(明治三十七年九月号、三十八年一月号、二月号三冊)

一、Wirgwen, A Sketch Book of Japan 一冊

昭和51年度JAC本部主催

現地集会(白山登山)

日本山岳会(本部)主催の現地集会は、加賀の白山でおこなわれます。実施細目は以下の通りですが、参加希望者は5月25日までに岐阜県養老郡養老町一五七、高木泰夫(〒五〇三一一三、tel〇五八四三一二二四五六)へ申込金一万円をそえて申込んで下さい。

実施期日 昭和51年6月12日(土) 6月15日(火)

実施経路 岐阜県平瀬より登山、頂上をへて石川県岩間温泉口ノ湯へ下山

実施日程

6月12日 岐阜羽島発11時 岐阜駅南口11時30分 美濃市12時

30分(休) 13時 白鳥町14時

平瀬15時 大白川合掌村見学 平瀬17時(泊)

6月13日 起床5時 出発6時 大白川ダム9時 室堂5時 頂上16時 室堂16時30分(泊)

6月14日 起床4時 出発5時 30分 小椋平 岩間温泉口ノ湯 15時30分(泊)

6月15日 岩間温泉口ノ湯発9時40分 白山下 金沢駅着12時15分(解散)

参加料 一万八〇〇〇円(岐阜羽島より岩間温泉までの3泊4日の交通・宿泊費。ただし最終日の岩間・金沢間の交通費は含まれない)

ウェストン祭

六月六日(日) 上高地ウェストン碑前。詳細は次号で。

●本暮翁碑前懇親会 五月十五日(土)三時までに集合 山梨県金山平有井館 参加費四〇〇〇円(交通費別) 四月末までにJAC事務局へ申込み。主催・日本山岳会有志

昭和五十一年四月二十日発行 113 東京都文京区湯島一六六一 利根川商事株式会社ビル

発行所 法人 日本山岳会 発行者 今 西 錦 司 編集代表 大 森 久 雄 (昭三二八六代表)

振替口座東京三二八六二九番 東京都港区赤坂一丁目三番六号 印刷所 株式会社 技 報 堂

登山・スキー用具専門店

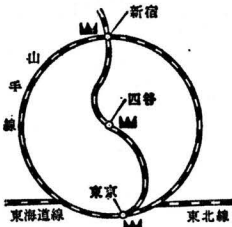
●買いやすい
山の店

山の店

●北へ来たら
山の店

大阪市北区梅ヶ枝町101
TEL. 06(362)5736

●フレッシュな
山の店



四谷店 東京都新宿区三栄町三番地
TEL (351) 7432-1912
八重洲口店 東京都中央区八重洲二の五
TEL (271) 1560-8575
新宿店 新宿ステーションビル四階
サービスショップ
TEL (352) 6564
日本信販加盟店



山友社 たかはこ

山とスキーの専門店

片桐

東京都文京区湯島3丁目38-9

片桐 盛之助

電話 東京(831) 1794・6680



かたるシンティ
でんや 281-8456
中央区八重洲4の1

秀山荘

登山とスキー具

イワタ

東京都中央区日本橋通2-1
PHON: 271-7686・1718

登山用具の専門店

好日山荘



東京店・中央区銀座3-5-7 (561)3600・(567)9031
東京店・中央区銀座3-4-6 (561)0966 スキー店
大阪店・北区曾根崎上1丁目47 (364) 0933 (代)
福岡店・須崎町1-4 (28) 3440

日本山岳会編

渡辺公平

島田 巽

望月達夫

藤島敏男

加藤泰安

茗溪堂

電話 〇三・二九一四四三振替東京八二四七三

●お買上、ご注文は最寄り書店でどうぞ!

一九七六年版 山日記

A 六ポケット判
定価九五〇円

山好き同志の贈りものに喜ばれています。
しやれたプレゼントカードがつけました。

山は満員

A 五判三六〇頁
定価二、二〇〇円
送料四〇〇円

自然との交流の趣きの深さがある山行記であり、山岳史上のエピソードがあり、現代登山界や自然破壊の問題にもふれ静かな感動を呼び起こす。

山・人・本

A 五判三七四頁
定価二、四〇〇円
送料四〇〇円

山がとりもつ種々の書物とのめぐり合い。その本を通しての心暖まる人との交わり。ながい年月、本に親しんできた著者の興味深い書き下し。

新刊のご案内

遠い山 近い山

炉辺閑話のような気易さで、山の仲間たちに語りかける、ひっそりとした山や、人々のあまり知らない峠の紀行集——B 六判三〇四頁

山に忘れたパイプ

登山歴六十年を越える著者のよき時代の静かな山旅から現在までの山登りの紀行を中心に随想、書評、書信を収録。——菊判五八〇頁

森林・草原・氷河

近代登山家の一人である著者が年にわたる、蒙古、ヒマラヤ等探検と登山の紀行、ほかに格調高いエッセイ収載。——A 五判四八二頁

近日 再刊のご案内 好評重版中!

ネパール登山規則 (前号につき)

- (2) Half of the amount of royalty payable under Sub-rule (1) shall be paid within three months after obtaining a license for mountaineering, and the balance before launching the expedition.
 - (3) In case the concerned mountaineering team abandons its expedition after paying half of the royalty under Sub-rule (2), it shall not be refunded.
 - (4) The license obtained by any mountaineering team under Sub-rule (3) of Rule 3 shall ipso facto be deemed cancelled in case it fails to pay half of the royalty within three months from the date of obtaining the license.
 - (5) Royalty for mountaineering shall be paid in the convertible foreign currency prescribed by His Majesty's Government.
 - (6) The royalty paid by any mountaineering team shall not be transferred in favor of another mountaineering team.
5. Liaison Officer
- (1) In the course of its expedition, every licensed mountaineering team shall be required to be accompanied by a Liaison Officer deputed by His Majesty's Government.
 - (2) The Liaison Officer to be deputed under Sub-rule (1) shall be selected by His Majesty's Government from among incumbent or former officers of the Royal Army or the Nepal Police Force and qualified persons recommended by the Nepal Mountaineering Association. (3) The concerned mountaineering team shall provide the Liaison Officer deputed under Sub-rule (1) with the following facilities from the time of departure for the expedition to the time of return:—
 - (a) Daily allowance ...Thirty-five rupees
 - (b) Personal accident insurance ...Rs 200,000
 - (c) Two sleeping bags, two woolen trousers or knickers, four pairs of socks, one pair of gloves, one pair of snow-shoes, one feather jacket, one wind jacket, one sweater, two shirts, one woolen cap, one ice-axe, one tent, one pneumatic or rubber bed, one rucksack, one pair of snow glasses, one umbrella or rain-coat, and facilities of food, medical treatment, and porters.
6. Functions and Duties of the Liaison Officer
- The functions and duties of the Liaison Officer who accompanies a mountaineering team shall be as follows:—
- (a) To act as an interpreter from the starting point of the caravan of the mountaineering team up to the base camp, and solve problems facing the team on the route to the best of his intelligence and knowledge.
 - (b) To stay at the base camp as long as the expedition lasts, and transmit information through expeditions means to His Majesty's Government in respect to the program and progress of the expedition, and of any accident.
 - (c) To maintain discipline among Sardars, guides, and all categories of porters and laborers accompanying the expedition, and prevent any ill-feeling of quarrel among them.
 - (d) To pacify any quarrel or untoward incident between any member of the expedition and the local people, or among the Sardars, guides or porters, to the best of his capacity, and in case he cannot do so, take necessary action or direct necessary action to be taken with the help of the nearest police station, or the local district administration or Panchayat.
 - (e) In the event of the loss of the walkie-talkie, wireless set, or any other equipment used by the mountaineering team, or of the death of or physical injury to any member of the expedition, sardar, guide or porter as a result of an accident, or any serious crime which has been or is likely to be committed, to report His Majesty's Government accordingly.
7. Functions, Duties and Responsibilities of the Sardar
- The functions, duties and responsibilities of a Sardar accompanying a mountaineering team shall be as follows:—
- (a) To act in close contact with the Liaison Officer,
 - (b) To work with due consideration to the common interests of guides, high-altitude porters, and local porters accompanying the mountaineering team and the laborers of the base camp,
 - (c) To bear full responsibility for preventing misappropriation of or damage to the goods and equipment belonging to the mountaineering team,
 - (d) To offer necessary advice to the leader and members of the mountaineering team on the safest and most convenient means of climbing to the best of his knowledge and information,

(以下次号へ)

会務報告

2月理事会

(2月5日午後6時本会ルーム)

▽出席者、今西会長、織内、望月各副会長、浜野、高遠、皆川、黒石、神崎、橋本、浜口、浅田各理事、太田監事、小原、浜野、折井、宮下各評議員、委任山本健、近藤、小倉、山本良、大森、田村俊各理事、林監事

▽議案

・ナイロン・ザイルの件 (浜野)

この問題については種々検討の結果プロジェクトチームで対策を協議する。了承

・テンジン・ノルゲイ氏歓迎会について (神崎)

会員との懇談会を2月12日(木)午後6時半より湯島会館で開催

了承

▽報告事項

・ナンダ・デヴィ登山について (宮下)

準備状況報告、募金協力お願いする

・カメット登山について (黒石)

準備状況報告

・集委員会 (神崎)

支部懇談会2月21日、22日

岐阜県伊吹山山麓にて

ナンダ・デヴィ登山隊協賛スキーバス3月13日、14日万座温泉スキー場にて

新入会員オリエンテーション2月27日(土)

・学生部 (浅田)

1月17日に総会を開き、来年度委員長として千葉大加藤秀之君を選出

ルーム日誌

(51年2月)

2日(月) 会報委員会 集委員会

3日(火) 婦人ヒマラヤ研究会

4日(水) 財務委員会、学生部

5日(木) 山岳編集委員会

9日(月) 理事会

9日(月) 集委員会 婦人ヒマラヤ研究会

13日(金) 常務理事会

16日(月) 集委員会 婦人ヒマラヤ研究会

17日(火) 海外連絡委員会

19日(木) ナンダ・デヴィ委員会

20日(金) 図書委員会小林義正氏追悼会

23日(月) 集委員会、婦人ヒマラヤ研究会

24日(火) 自然保護委員会

26日(木) ナンダ・デヴィ委員会

28日(土) ナンダ・デヴィ委員会(合同登山について)

二月中来室者四七〇名

会員異動

退会者

五二七七 東京教育大学山岳部

物故者

一〇八七 伊藤 秀五郎 (51・2・22)

除籍取消

五八二七 吉田 実

支部変更

七二九九 許山 隆 山梨支部